２１世紀瓦版６８２号（2014 年 10 月 10 日）

日本版の〝セウォル号事件〟として韓国を安心させた朝日の虚報

８.１８産経の二面には、４００頁もの「吉田調書」の概要を読者に伝えるために、その抄録連載の１回目が掲載され、**「菅氏 わめく間に爆発」－「第１近辺へ退避 伝わらず」**の見出しの下、吉田証言が「撤退」問題に切り込んでいる。（太字は原文どおり、ネットによる付加部分は〔 〕で括る）

《東京電力福島第１原発事故で、所長として現場の指揮を執った吉田昌郎氏は政府の事故調査・検証委員会（政府事故調）に対し「全面撤退」を否定するなど現場の状況を詳細に説明した。聴取内容を１０回に分けて詳報する。１回目は吉田氏の菅直人元首相に対する評価を中心にまとめた。質問者は事故調の調査委員。

〈菅直人首相は事故発生翌日の平成２３年３月１２日午前７時１１分に福島第１原発を視察に訪れた〉

――いつごろ首相が来られるという話になったのか

吉田氏「時間の記憶がほとんどないんです。（午前）６時前後とかには来るよ、という情報が入ってきたんだろうなという」

〔――何のために来ると

吉田氏「知りません」〕

――首相は所長に対し何を話したのか

吉田氏「かなり厳しい口調で、どういう状況になっているんだということを聞かれたので、電源がほとんど死んでいます、制御が効かない状況ですと。何でそうなったんだということで、津波で電源が全部水没して効かないですという話をしたら、何でそんなことで原子炉がこんなことになるんだということを斑目（まだらめ）（春樹原子力安全委員長）先生に質問したりとか」

――いかに現場が厳しい状況か説明したのか

吉田氏「十分説明できたとは思っていません。自由発言できる雰囲気じゃないですから」

――現場に近い状況が壁一枚向こうにあるが、首相は激励に行かれてないか

吉田氏「はい」

――中を（視察・激励しに行かなかったのか）

吉田氏「全く、こう来て、座って帰られましたから」

〈菅首相は３月１５日午前５時半ごろ東電本店の非常災害対策室に入った〉

――何をしに来られていたんですか

吉田氏「何か知らないですけれどもえらい怒ってらしたということです」

〈菅氏は「撤退したら東電は百パーセント潰れる」と発言〉

吉田氏「ほとんどわからないですけども、気分悪かったことだけ覚えていますから、そういうモードでしゃべっていらしたんでしょう。そのうちに、こんな大人数で話をするために来たんじゃない、場所変えろとか何かわめいていらっしゃるうちに、この事象になってしまった」

〈事象とは２号機の格納容器の圧力抑制室の圧力計が下がり、４号機の原子炉建屋が爆発したこと〉

――テレビ会議の向こうでやっているうちに

吉田氏「そうそう。ですから本店とのやりとりで退避させますよと。放射能が出てくる可能性が高いので一回、２Ｆ（福島第２原発）まで退避させようとバスを手配させたんです」

――細野（豪志首相補佐官）さんなりに、危険な状態で撤退ということも（伝えてあったのか）

吉田氏「全員撤退して身を引くということは言っていませんよ。私は残りますし、当然操作する人間は残すけども、関係ない人間はさせますからといっただけです」

――１５日午前に２Ｆに退避した人たちが帰ってくる

吉田氏「本当は私、２Ｆに行けとは言ってないんですよ。車を用意しておけという話をしたら、伝言した人間は運転手に福島第２に行けという指示をしたんです。**私は福島第１の近辺で線量の低いようなところに一回退避して次の指示を待てと言ったつもりなんですが、２Ｆにいってしまったというんでしようがないなと。**２Ｆに着いたあと、まずＧＭ（グループマネジャー）クラスは帰ってきてということになったわけです」

――所長の頭の中では１Ｆ（第１原発）周辺でと

吉田氏「線量が落ち着いたところで一回退避してくれというつもりでいったんですが、考えてみればみんな全面マスクしているわけです。何時間も退避していて死んでしまう。**よく考えれば２Ｆに行**

ったほうがはるかに正しい」
――退避をめぐっては報道でもごちゃごちゃと
吉田氏「**逃げていないではないか、逃げたんだったら言えと**。本店だとか官邸でくだらない議論をしているか知らないですけども、現場は逃げていないだろう。それをくだらない、逃げたと言ったとか言わないとか菅首相が言っているんですけども、何だ馬鹿野郎というのが基本的な私のポジションで、逃げろなんてちっとも言っていないではないか。注水とか最低限の人間は置いておく。私も残るつもりでした。場合によって事務の人間を退避させることは考えていますと言った」
――本店から逃げろというような話は
吉田氏「全くない」
――「撤退」という言葉は使ったか
吉田氏「使いません、『撤退』なんて」
――使わないですね
吉田氏「『撤退』みたいな言葉は、菅氏が言ったのか誰がいったか知りませんけども、そんな言葉、使うわけがないですよ。テレビで撤退だとか言って、馬鹿、誰が撤退なんていう話をしているんだと、逆にこちらが言いたいです」
――政治家ではそういう話になってしまっている
吉田氏「知りません。アホみたいな国のアホみたいな政治家、つくづく見限ってやろうと思って」
――ある時期、菅氏は自分が東電が逃げるのを止めたみたいな（発言をした）
吉田氏「辞めた途端に。あのおっさん（菅氏）がそんなの発言する権利があるんですか。あのおっさんだって事故調の調査対象でしょう。そんなおっさんが辞めて、自分だけの考えをテレビで言うのはアンフェアも限りない。事故調としてクレームつけないといけないんではないか」
〈政府事故調は菅政権が設置を決定。２３年６月７日の初会合で菅氏は「私自身を含め被告といったら強い口調だが」と発言した〉
――この事故調を自分（菅氏）が作った
吉田氏「私も被告ですなんて偉そうなことを言っていたけども、被告がべらべらしゃべるんじゃない、馬鹿野郎と言いたいですけども。議事録に書いておいて」　　（肩書は当時）》
以上の産経掲載の「吉田調書」を目にすると、朝日のスクープ記事なるものは国民の知らない「吉田調書」に基づいた朝日記者の見解を打ち出しているにすぎないことがはっきりしてくる。なぜ産経掲載程度の「吉田調書」をきちんと公開したうえで、朝日は自分たちの見解を示そうとはしなかったのか。吉田所長は菅元首相の発言に対して「アンフェアも限りない」と怒気を強めていたが、私たちも「吉田調書」をほとんど公開せずに自分たちの見解のみを押しつけようとした朝日のやり方に対しては、「アンフェアも限りない」と怒気を強めたくなってくる。いずれにしても、朝日と産経のどちらが真実に近いかは、どちらが「吉田調書」により多く向き合っているかによって明らかになったであろう。
８.１８産経の三面には、６８０号に転載した門田隆将のコラム「朝日新聞は事実を曲げてまで日本人をおとしめたいのか」以外に、「英雄一転『恥ずべき物語』」の見出しの下欄には「逃亡の誤解 世界に広がる」の小見出しで、５．２０朝日の「撤退」報道に対する海外メディアの反応が紹介されている。
《海外の有力メディアは、「吉田調書」に関する朝日新聞の記事を引用し、相次いで報道した。韓国のセウォル号事故と同一視する報道もあり、「有事に逃げ出した作業員」という印象が植え付けられている。
米紙ニューヨーク・タイムズ（電子版）は５月２０日、「パニックになった作業員が福島第１原発から逃げ出した」と報じた。「朝日新聞によると」という形で、記事では第１原発所員の第２原発への退避を「命令違反」だと報じている。
英紙ガーディアンは５月２１日付で「『フクシマ・フィフティーズ（福島の５０人）』と呼ばれたわずかな〝戦闘員〟が原発に残り、ヒーローとしてたたえられた。しかし、朝日新聞が明らかにしたように６５０人が別の原発に逃げたのだ」と記した。豪有力紙オーストラリアンも（引用者によるネットからの挿入－「福島のヒーローは、実は怖くて逃げた」と見出しにした上で、「事故に対して自らを犠牲にし果敢に闘った」）「『フクシマ・フィフティーズ』として有名になったが、全く異なる恥ずべき物語が明らかになった」と報じた。
韓国紙・国民日報は「現場責任者の命令を破って脱出したという主張が提起されて、日本版の〝セウォル号事件〟として注目されている」と報道。韓国で４月に起きた旅客船沈没事故で、船長が真っ先に逃げたことと同一視している。》